

道教關連のオンライン研究活動について

(二〇二〇年～二〇二一年九月)

酒 井 規 史

二〇一九年十一月、中國・武漢で初めて検出されたという新型コロナウイルス (COVID-19) はまたたく間に全世界中に廣がり、多くの被害をもたらした。本稿を執筆している二〇二一年九月現在もこのウイルスの流行は

オンライン研究イベントに参加したことが無いというはまれであろう。

筆している二〇二一年九月現在もこのウイルスの流行は續いており、いつ収束するのか分からない状況である。

道教研究もその例外ではなく、とりわけ中國ではオンラインの講演會や研究會が盛んであり、少なくとも週に一度は何かしらのイベントが開催されている。本稿ではパナデミック下における學術活動の記録として、筆者が参加したものを中心に道教關連のオンライン研究活動をいくつか紹介することにした。

そのような状況の中、學術活動を繼續するため、Zoom や Voov Meeting (騰訊會議) などのオンライン會議ツールを使った學會・研究會・講演會が世界各地で開催されている。この約一年半の間に、學術研究に携わる者で

はじめに、西南交通大學（中國・成都）の呂鵬志氏の主催による一連の活動を紹介する。個人的なことを記せば、筆者が初めて参加したオンライン研究イベントは、呂氏の講義であった。今となつては日常的に使用しているZoomも、講義を聴講するためにインストールしたのを覚えている。

呂氏が二〇二〇年二月に開講した「『道教儀式』課程」は、古代から現代にいたる道教儀禮史について講義する大學院の授業である。(一)文献學と歴史學的方法、(二)人類學的方法、(三)ほかの宗教・思想との比較研究を重視するというコンセプトが掲げられていた。以下、各回のテーマと講師を紹介する（カッコ内は講師名）。

- 「課程導論」(John Lagerwey、呂鵬志、吳楊)
- 「東漢六朝天師道儀式」(吳楊)
- 「兩晉南北朝時期的方士儀式」(呂鵬志)
- 「東晉末劉宋融攝天師道・佛教和方士傳統的靈寶科儀」(呂鵬志)
- 「劉宋高道陸修靜對靈寶科儀的整理和發展」(吳楊)

「五世紀以降道教法次の逐步形成與晉唐五代道教儀式的發展趨向」(吳楊)

「宋元符籙派道教儀式的傳承和變革…天心派、神霄派、童初大法、靈寶大法、淨明道、北帝法等新道派／法的產生和傳衍與正一・上清・靈寶三大符籙道派的復興和革新」(一)天心正法(李志鴻)

同(二)淨明道(許蔚)、同(二下)宋代靈寶派的發展與變革(陳文龍)

同(三上)金籙大齋與鍊度(祝逸雯)、同(三下)中國十二世紀以降之普度儀式(劉婧瑜)

「宋元全真道科儀及佛教禪宗清規對全真道制度和儀式的影響」(Jacopo Scarin、甘沁鑫)

「正一道、全真道二分天下的格局與明清道教儀式」(趙川、楊三善)

「現存正一科儀」(一)授籙(呂鵬志)

同(二)驅邪(巫能昌、林振源)

同(三)濟生(羅丹、徐天基、林振源)

同(四)度死(潘君亮、林振源)

「現存全真科儀・傳戒」（任宗權）

「課程結尾・道教儀式與中國文化」（呂鵬志、任宗權、劉紅）

題目を見て分かる通り、六朝時代に始まり、現代の中国各地における道教儀禮に至る構成となっている。文献史料と現地調査の兩方を駆使して研究を行う呂氏ならではの幅広い視野にもとづいて講義が構成されているのがお分かりいただけるであろう。また、後半に中国各地や海外からも各テーマにおける第一線の研究者を講師に招聘していたのは、まさにオンラインの利点を活かしたものである、といえよう。

また、西南交通大學の學生だけでなく、外部に公開されたのもオンラインならではのである。研究者と道教界の人士から成るオブザーバー約七十名（筆者もその一人）に優先的に聴講する権利が與えられ、餘裕があればその他の関係者にも開放された。途中からは、週末に講義の録畫の「再放送」を行い、當日に参加できなかった場合の便宜がはかられていた。

中国で主流の SNS とある Wechat（微信）にも専用のグループが設置され、講義終了後そちらに場所を移して活発な質疑がなされることもしばしばであった。また、道士たちも参加しているため、實際に儀禮を實踐する立場から意見が出されることもあり、研究者と宗教者の交流のプラットフォームとなっていたのも印象的であった。

二〇二〇年九月からは「中國宗教文獻」課程が開講され、道教だけでなく儒教・佛教や民間信仰もふくめた、道教関連の文獻資料についての講義が行われた。こちらの開催形式もほぼ上述の「道教儀式」課程と同じであった。¹⁾

呂氏が設立した西南交通大學の中國宗教研究所では WEB サイトも公開し、中國宗教の研究について活發に情報²⁾の發信を行っている。短期間のうちに、學會や研究會、新著の情報³⁾をいち早く知りたい場合、まず参照すべきサイトとなった。また、定期的にそれらの情報の中から主要なものをまとめた研究通信も發行しており、PDF ファイルで公開されている。

以上、西南交通大學の呂鵬志氏を中核とする一連の研究交流活動は、オンラインであることを積極的に利用した例として、特筆すべきものであろう。

日本では各種の學會や研究會がオンラインで開催されるようになったが、中國でも同じように従来対面で行われていたイベントがオンライン化された例もある。日本にいながらにして、一級の研究者による講演や發表を聴講できるようにしたのはオンライン化による恩恵といえよう。以下、人民大學と明道道教文化研究所の研究イベントについて紹介したい。

人民大學の佛教與宗教學理論研究所・國際佛學研究中心・哲學院・高等研究院の共催による「宗教學術講座」は、もともと對面で中國各地から専門家を招聘して行われていた。姜守誠氏のオーガナイズにより、道教關係の講座はいずれも第一人者、もしくは最先端の研究者が招かれている。パンデミックを機に、二〇二〇年四月からオンラインによる配信が始まった。以下、二〇二〇一年

九月までの題目と講演者を紹介する（カッコ内は講演者）

「弧魂考」（許蔚）

「周氏冥通記」析疑」（王家葵）

「回歸宗教學：關於『眞誥』及六朝南方神仙道教研究的 一些思考」（趙益）

「教行上清：茅山道教文化的歷史淵源與現代價值」

（袁志鴻）

「爭衡聖域：中國中古時期洛陽、杭州佛教、道教和

儒家的空間交織與互動」（謝一峯）

「重構道教與中國傳統數學互動史的嘗試」（楊子路）

「歷史上的扶乩：術語、類型與器物」（胡劭辰）

「重思明清道觀經濟：以南京爲例的討論」（賀晏然）

「近代城市發展中的道教變革」（王闔）

この一年半ほどのラインナップでは、若手・中堅の研究者が登壇することが多かった。各領域において研究が進展している中國の現状を反映しているといえよう。

次に、明道道教文化研究所によるオンライン講演會の

シリーズを紹介したい。明道道教文化研究所は二〇〇七年に華東師範大學と上海市道教協會が合同で設立したもので、道教文化、中國の傳統文化の研究を目的としている。初代の所長は劉仲宇氏、現在の所長は蔡林波氏である。

同研究所では、新型コロナウイルスの流行前から「上海『道教之友』學術沙龍（サロン）」と題し、上海城隍廟などを会場にしてゲストを招いた講演會やイベントを行っていた。それを第十一回目からオンライン形式に変更した。以下、講師と題目を紹介する。

第十一回「道教圖像學研究・神仙真靈」（李遠國）

第十二回「我在道壇做田野・方法・經驗與故事」（謝聰輝）

第十三回「上海散居道士的道藝傳承與困境」（田兆元）

元）

第十四回「第三十代天師虛靖真君的文學創作與文學

史地位」（羅爭鳴）

第十五回「雷法在地方之形成…以兩部科儀書爲中心

的討論」（筆者）

以上のオンライン講演會については、Wechatなどで情報が公開され、基本的に誰でも参加することができるようになっていた。毎回の発表には對論者がつき、外部の参加者も交えて質疑が行われた。筆者が講演した際には、李志鴻氏と白照傑氏にコメントをいただいた。

また、中國各地の研究者や大學院生が参加し、さらには道士の聽講者もいたようである。日本にいながら學術交流ができるようになった利點を感じた次第である。⁽³⁾

以上、中國におけるイベントを中心に紹介してきたが、歐米でもオンライン研究イベントは行われている。道教に關連するものとして、ハワイ大學の“The Global Daoist Studies Forum（全球道教研究論壇）」と題した一連のイベントを紹介したい。このフォーラムは、道教研究者の交流を促進し、各研究領域や専門を超えた交流を意圖したものである。⁽⁴⁾

二〇二一年三月には、同年二月に逝去した Kristofer

Schipper 氏の追悼イベントが行われた。道教研究に大きな足跡を残した同氏は、自ら學生を育成するだけでなく、國際的な研究交流も多く、その影響は多大なものであったの言うまでもない。このイベントでも各國からの参加者があり、同氏の學術的な業績や同氏との交流を

ふりかえった。Elena Valussi・David Mozina・劉婧瑜の三氏がオーガナイザーをこめ、Brigitte Baptdier・Patrice Fava・Vincent Goossaert・John Lagerwey・李豊楸・丸山宏・David Palmer・Franciscus Verellen・Francois Picardの各氏が登壇した。その後 Paul Katz・Kenneth Dean・Terry Kleeman・王崗・劉迅・郭武・Gil Raz・金志球氏らも發言を行った。

次に、二〇二一年五月には、"New Books in Daoist Studies"と題して、最近出版された道教關連の著作を紹介するイベントが行われた。"A Library of Clouds: The Scripture of the Immaculate Nunen and the Rewriting of Daoist Texts" (張超然・Jonathan Pettit 共著)と "Knocking the Banner: Ritual and Relation-

ship in Daoist Practice" (David Mozina 著)の二冊について、それぞれの著者に對してインタビューが行われ、著作の内容と著者の意圖をより明らかにしようという試みであった。

二〇二一年七月には "Epigraphic and Archeological Materials as Sources for Daoist Lived Religion (道教考古石刻研究項目)" が開催された。各種の考古學的資料と、神像・造像石・碑文・石窟・墓誌などの金石資料を用いて、道教の社會における役割や儀禮などについて研究するプロジェクトの一環である。

當日は、まず白彬氏によつて、道教の考古學的資料・金石資料についての概説があり、多くの資料が紹介された。次に、Gil Raz氏によつて "Stele-Statues and Texts: Two Examples"と題した發表がされ、南北朝時代の造像石を主題にして、金石資料を使った研究の實例が示された。その後、研究プロジェクトのメンバーである王崗氏の司會で討論が行われた。

二〇二一年九月には "The Companion to the Da-

ozang Jiyao 《道藏輯要提要》：Fifteen Years in the Making of a Fundamental Tool for the Study of Late Imperial Daoism”が行われた。故 Monica Esposito 氏の主導によりはじまった『道藏輯要』の研究プロジェクトは、京都大學から香港中文大學に中心が移りながらも継続し、ついに『道藏輯要』提要』(二〇二一年、香港中文大學出版社)として結實した。今回のイベントは、その十五年にわたる編纂の過程を回顧し、學術的な意義を再検討するものであった。登壇者とそれぞれの擔當項目は以下のとおり。黎志添（全體の概観）、郭武・李遠國（四川における研究活動）、Elena Valussi (Esposito 氏の研究と英語圏の研究チームの活動)、金志玟氏（日本の研究チームの活動）、胡劫辰（最終的な編纂の過程）、森由利亞・Vincent Goossaert（後期帝政期における道教への觀點の變化）。

以上、駆け足ではあるが、この約一年半に開催された道教関連のオンライン研究活動について紹介した。いず

れのイベントも、パンデミックという状況下でも研究活動を絶やさないために開催されたものであり、関係者に敬意を表したい。

オンライン研究イベントには物理的な制約が少ないため、世界中からの参加が可能であり、普段よりも研究者同士の交流の機会を増やしたという側面もある。今後、パンデミックが収束して対面による研究イベントが開催されるようになったあとも、おそらくオンライン研究イベントは継続され、対面のイベントと併用されるようになるであろう。學術活動全體における意義や影響を考えるのはもう少し後になりそうであるが、本稿での記録がその時に参考になれば幸いである。

註

(1) 道教関係では、呂鵬志・王家葵・趙川氏らが登壇した。紙幅の都合上、本稿では詳細な紹介はしないが、以下に述べる中國宗教研究中心のサイトには毎回の講座の概要が掲載されているので、そちらをご参照いただきたい。

(2) <https://cscr.swjtu.edu.cn/>

(3) この項で紹介した例は公開性が高いものである。それに對して、オーガナイザーを中心に、發表者とコメントーター、関係者のみが参加するワークショップも開催された。

まず、姜子策氏が主催した、一連のワークショップを紹介したい。中國國內の若手・中堅の研究者の交流の機会を設け、研究の最新動向を共有する目的で企画したことである。以下、毎回のテーマを紹介する。

「道教・女性・敘事與圖像」

「神兵天將・武道・武功・武人」

「書架上的隱喻・道教與閱讀」

「法天象地・道教與天文地理」

「道教與神聖空間」

「道教與城市」

なお、二回目では筆者、三回目では當會會員の廣瀬直記氏が報告を行った。

また、二〇二〇年十一月には、上述の姜守誠氏の主催による道教美術をテーマとしたワークショップ「走向歴史情境中的道教圖像學術工作坊」も開催された。こちらも關係者以外には公開されない形式で開催された。筆者はコメントーターとして参加した。

いずれも参加者は親しい間柄であることが多く、議論も活発に行われていた。また、若手・中堅が中心である

ため、お互いにリラックスして率直な意見交換がなされていた。

(4) ウェブサイトには過去の活動記録と、ここで紹介した各オンラインイベントの録畫も公開されている。録畫はYoutubeにアップロードされているので、直接検索して視聽することも可能である。

<https://manoa.hawaii.edu/global-daoist-studies-forum/category/forum/>